

# ミオちゃんが危ない！



## 目次

【場面 教室】	一	かえりの会	一ページ
【場面 公園】	二	かえり道	五ページ
【場面 公園】	三	ミオちゃんが危ない！	九ページ
【場面 子ども110番の家】	四	正義のみかた！ 「子ども110番のいえ」のおばさん	十二ページ
【場面 ミオちゃんの家】	五	おかあさん	十八ページ

ナレーター

この劇は、ミオちゃんという女の子が、学校からお家に帰る途中、悪いおじさんにつれていかれそうになってしまつてお話です。でも、だいじょうぶー子どもー〇番の家のおばさんが助けてくれて、ミオちゃんは、ぶじにお家に帰ってきます。この劇を見ながら、ミオちゃんが、どうして悪いおじさんにつれていかれそうになってしまったのか

ミオちゃんが、もしあなただったどうしたか

学校から帰るときに、どんなことに気をつけたらよいかなどについて、考えてみましょう。それでは劇を始めます。

【場面】 教室

一 かえりの会

ナレーター

ミオちゃんは、このまちの小学校に通う一年生です。きょうも元気に学校に来て、お勉強も運動も、いっしょうけんめいがんばりました。お昼の給食も、がんばって全部たべました。

(かえりの会の始まりを告げる鐘の音) キーン、コーン、カーン、コーン。

ナレーター

かえりの会のはじまりを知らせるチャイムが鳴りました。さあ、

かえりの会のはじまりです。(子どもたちは、全員着席している)

先生

それじゃーお当番さん、お願いします。

友達(当番)

(大きな声で)立ちましょう！(子どもたちが全員起立する)

友達(当番)

(大きな声で)かえりの会をはじめましょう！

子どもたち

(全員が大きな声で)はじめましょう！

友達(当番)

すわりましょう！(全員が座り、先生の方を見る)

先生

かえりの会を始めます。今から先生が、みんなに大切なお話をします。よく聞いてね。(子どもたち大きくうなずく)このころね、学校からお家に帰る途中、知らないおじさんから声をかけられた人がいます。このおじさんはね、「あめ玉をあげるからついておいで」って声をかけてくるんだって。みんな、学校から帰る途中に、このおじさんから、「あめ玉をあげるよ。ついておいで」って声をかけられたらどうするかなあ？……。

トモくん

(手を挙げて大きな声で)ハイッ！

先生

はい、トモくん。

トモくん

(起立して、大きな声で)「いらない」っていう。ついていかないよ。

先生

(大きくうなずきながら)そうだね、知らないおじさんだもの



(イメージ)

(メモ欄)

ね。絶対に、ついていつちゃあだめだよね。

サキちゃん  
（座ったまま、トモくんの方を見て、心配そうに）でも、そのおじさんが、「おいで、おいで」って、腕を引っぱってくるかもしれないよ。

先生  
そうだね、腕を引っぱってくるかもしれないね。そうしたら、どうすればいいのかなあ？……。

タツヤくん  
（手を挙げて大きな声で）ハイー！

先生  
はい、タツヤくん。

タツヤくん  
（起立して、大きな声で）「いやだーっ！」とか「キャーッ！」って、大きな声で叫ぶ！

先生  
（大きくうなずきながら）そうだね。だまっていたら、つれていかれちゃうものね。もし、つれていかれそうになったら、大きな声で叫ぶんだよ。それからね、『キャーッ！』って叫ぶと、遊んでふざけているように聞こえるかもしれないよね。だから、「ウォーッ！」って叫ぼうね。そうだ、みんなでそろって叫んでみようよ。先生が「いち・にの・さん」って言うから、そのあとに、みんなそろって「ウォーッ！」って叫んでみて。いい？できるかな？

子どもたち  
（手を挙げて大きな声で）ハイー！

先生  
はい、それじゃーみんな立ってください。（子どもたち全員起立する）

先生  
それじゃーやってみるよ！（口の前に両手で輪を作り、大きな声で）いち・にの・さーん！

子どもたち  
（思い切り大きな声で）ウォーッ！（叫び終わったら、起立したままでいる）

先生  
はい、よくできました。つれていかれそうになったら、今みたいに大きな声で叫ぶのよ。わかった？

子どもたち  
（手を挙げて大きな声で）ハイー！

先生  
はい、それじゃーかえりの会をおわります。お当番さん、お願いします。

友達（当番）  
さようなら！

子どもたち  
さようなら！

（子どもたちは、先生に「さようなら」と挨拶しながら教室を出ていく。先生は、「さようなら」と答えながら、子どもたちを見送る。ミオちゃん、タツヤくん、サキちゃんが教室に残る。）

タツヤくん  
（サキちゃんと二人でミオちゃんのそばに寄り）ミオちゃん、



（イメージ）



（イメージ）

いっしょに帰ろうよ。

ミオちゃん うん、いっしょに帰ろう。

(三人は、そろって先生に「さようなら」と挨拶し、教室を出る。先生は、三人を見送ったあと、最後に教室を出る)

ナレーター サキちゃんとタツヤくんのお家は、ミオちゃんのお家のすぐ近くにありますが。だから、三人は、学校に来るときも、学校からお家に帰るときも、いつもいっしょです。もし、先生が話していたおじさんに出会っても、三人いっしょだから安心だね。

## 【場面二】 ～公園～

### 二 かえり道

ナレーター ミオちゃんは、タツヤくとサキちゃんといっしょに学校の門を出ると、いつも通う道を歩いてお家に向かいました。ミオちゃんのお家の少し手前に、小さな公園があります。この公園には、

ブランコやすべり台、ジャングルジムや、お砂場があるので、ミオちゃんは、いつもこの公園で、お友達と遊んでいました。

三人が公園の前まで来ると、すべり台の横に小さな箱が置いてあるのを見えました。

タツヤくん (公園の中の箱を見つけ、指を指して) あれ? あんな所に箱が置いてあるぞ。何だろう? 見に行ってみようよ。(と言ってミオちゃんとサキちゃんを誘う)

ミオちゃん・サキちゃん (おおきくうなずきながら) うん! (と答えたあと、タツヤくんに続いて箱に近づいていく)

タツヤくん (箱のそばまで来ると、ミオちゃんとサキちゃんの方を見て、不安そうに) なんだろう?

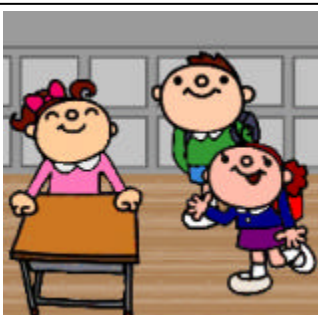
ミオちゃん・サキちゃん (声をそろえて、不安そうに) なにかしら……(と言ったあと、三人で箱の中を恐る恐るのぞく)

子猫たち (箱の中から顔を出して) みゃー、みゃー、みゃー、みゃー。  
ミオちゃん (うれしそうに) あーっ! 子猫だ!

ナレーター 箱の中には、小さな猫が二匹入れられていました。一匹は、茶色の子猫で、もう一匹は、まっ白な子猫です。ミオちゃんは、猫が大好きです。ミオちゃんのお家にもテンちゃんという名前の



(イメージ)



(イメージ)

まっ白な子猫がいます。(ナレーションの間、三人は子猫たちの頭をなでている)

サキちゃん (うれしそうに) わー、かわいいねー! (ミオちゃんもうれしそうにならずく)

タツヤくん

(うれしそうに) うん、ほんとにうにかわいいねー。(急に心配

そうな顔つきになり) でも、なんでこんな所にいるのかなあ。

捨てられちゃったのかなあ。

サキちゃん (元気な声で) だいじょうぶだよ。こんなにかわいいんだもん

きつと誰かが、もらってくれるよ。

タツヤくん そうだね、だいじょうぶだよ。(ミオちゃんは、黙ったまま

心配そうに子猫たちを見ている)

サキちゃん 寄り道をしていると、おかあさんに叱られちゃうから、早く

帰ろうよ。子猫たちがここにいることは、お家に帰ってから、

おかあさんに話してみるよ。なんとかしてくれるかもしれない

から……。

タツヤくん (安心したように) うん。(と言って大きくうなずく。ミオ

ちゃんは、黙ったまま、心配そうに子猫たちを見つめている)

ナレーター サキちゃんの言うとおりです。寄り道はいけません。でも、



(イメージ)

ミオちゃんは、子猫たちのことが、かわいそうでたまりません。もう少しだけ、子猫たちのそばにいてあげたいと思いました。

ミオちゃん (タツヤくとサキちゃんの方を見て) わたし、もうちょっと

ここにいます。タツヤくとサキちゃんは先に帰って。

サキちゃん (心配そうに) でも、おかあさんが「ひとりで帰ってきちゃ

だめ」って言ってたよ。ひとりで帰ると、悪い人につれていかれ

ちゃうって。それに、「あめ玉をあげる」って声をかけてくる

おじさんが来たらどうするの?

ミオちゃん (ニコニコ笑いながら) だいじょうぶ! わたしのお家は、すぐ

そこだし。それに、もしそのおじさんにつれていかれそうになっ

たら、大きな声で「ウォーッ!」って叫べばいいんでしょ?(と

言ったあと、箱のそばに座り、子猫たちの方を見て頭をなでる。

タツヤくとサキちゃんは、心配そうにミオちゃんを見ている)

ナレーター あれれ? ミオちゃん、ひとりになっちゃってだいじょうぶ?

タツヤくんもサキちゃんも、ミオちゃんひとりを公園に残して

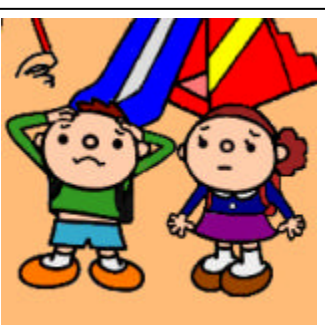
帰るのが、とても心配でした。だから、「ねえ、いっしょに帰ろ

うよ。」「と、何度も何度もミオちゃんに言いました。でも、ミオ

ちゃんは、「だいじょうぶ。」「と言って、子猫たちのそばを離れ



(イメージ)



(イメージ)

ようとしません。タツヤさんとサキちゃんは、しかたなく、ミオちゃんと公園でわかれて、ふたりだけでお家に帰ることにしました。

タツヤくん それじゃあミオちゃん、先に帰るからね。さようなら。

ミオちゃん (子猫を見て頭を撫でたまま) さようなら。

サキちゃん (心配そうに) ミオちゃんもすぐに帰った方がいいよ。

ミオちゃん (子猫を見て頭を撫でたまま) うん。(タツヤさんとサキちゃん

んは、心配そうに何度もミオちゃんの方を振り返りながら立ち去る。)

### 【場面 公園】

三 ミオちゃんが危ない！

ナレーター あらあら……。ミオちゃんは、とつとつひとりきりになって

しまいました。だいじょうぶかなあ……。心配です。

ミオちゃん (箱のそばに座ったまま、子猫たちの頭をなでながら) 君たちは、どこから来たの？

子ねこたち みゃー、みゃー、みゃー、みゃー。

(ミオちゃんが子猫たちに気を取られている間に、不審者が、辺りを警戒しながら、抜き足差し足でそっとミオちゃんに近づく。不審者の足下が、ミオちゃんの視界に入り、ミオちゃんが頭を上げる)

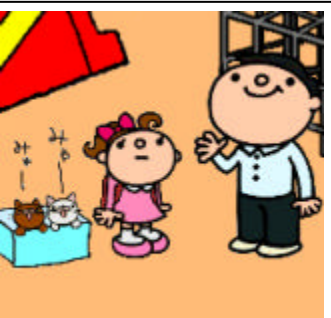
不審者 (ニコニコと優しくそうに笑いながら) おじょうちゃん、なにを  
しているの？

ミオちゃん 学校からのかえり道に、この箱を見つけたの。そしたらね、  
中にね、子猫が二匹いたの。鳴いていたからかわいそうになって、  
それでね……。と言葉に詰まり、両手で目をこすりながらシク  
シクと泣く。不審者は、ミオちゃんの話聞きながら何度もうな  
ずく)

ミオちゃん (顔を上げ、不審者の顔を見て) ねえ、おじさん。子猫たちを  
助けてください。(と、すがるように頼む。)

不審者 (ミオちゃんの頭をなでながら) おじょうちゃんは優しい子だ  
ね。(ほつびに、あめ玉をあげよう。)(と言いながら、スポンの  
ポケットからあめ玉を取り出してミオちゃんに渡す)

不審者 このままじゃあ、子猫たちが死んじゃうかもしれないね。そう  
だ、子猫たちを、もっと安全な所につれて行ってあげようよ。  
おじさんも、いっしょに行ってあげる。おじさんの車がそこに



(イメージ)



(イメージ)

あるから、いっしょに乗っていいよ。

ミオちゃん　でも……。と言いながら、困ったようにつつむいたまま黙り込み、子猫たちの顔をジッと見つめる)

ナレーター　ミオちゃんは、先生から、「あめ玉をあげるからついておいで」と、子どもに声をかけるおじさんのことや、知らない人には絶対についてはいけなと言われていたことを思い出したので。ミオちゃんは、どうしたらいいのかわからず、子猫たちの顔を見ていました。

不審者

(ミオちゃんと、一匹の子猫の腕を掴み)このままだと、子猫たちが死んじゃうよ。それでもいいの？おじさんといっしょに来れば、子猫たちを助けることができるんだよ。さあ、おじさんといっしょに行こう。(と言いながら、子猫の腕を離し、両手でミオちゃんの腕を強い力でグイグイと引っ張る。ミオちゃんは、連れていかれまいとして、後に体重をかけながら、不審者の手を振りほどこうと抵抗する。)

子猫たち

(心配そうに大きな声で)みゃー、みゃー、みゃー、みゃー。

不審者

(こわい顔で脅すように)おじょうちゃん、おとなしくついてこないとだめだよ。(と言って、ミオちゃんをにらみつける)

子猫たち

(心配そうに大きな声で)みゃー、みゃー、みゃー、みゃー。  
(しばらく泣き続ける)

ナレーター

ミオちゃんは、子猫たちが「みゃー、みゃー」となく姿を見て先生から言われたことを思い出しました。「そうだ、大きな声で『ウォーッ！』って叫ばなきゃ……。でも、こわさで胸がドキドキして、なかなか思うように声が出せません。ミオちゃんは、かえりの会で練習したように声を出してみようと思いました。そして、先生の「いち・にの・さん」の合図で声を出したようにやってみようと思いました。

子猫たち

(ミオちゃんを励ますように、ますます大きな声で)みゃー、みゃー、みゃー、みゃー、みゃー、みゃー。

ミオちゃん

(普通の声で)いち・にの・さん(ひとときわ大きな声で)ウォーッ！(不審者は驚いて、掴んでいた手を離し、ミオちゃんから少し距離をおいて辺りを心配そうに見回す)

【場面】 ～子どもも１１０番の家～

四 正義のみかた！

「子どもも１１０番のいえ」のおぼさん



(イメージ)



(イメージ)



(イメージ)

ナレーター

公園の向かいに、お菓子屋さんがあります。このお菓子屋さん  
は、子どもが困ったり、こわい目にあったときにかげこむと、  
助けてくれる、子ども110番の家です。お店の中では、おばさ  
んが、いつもお店番をしています。ミオちゃんの「ウォーッ！」  
という叫び声が、おばさんの耳に届きました。

ミオちゃん

(もう一度、ひときわ大きな声で)ウォーッ！(不審者は、  
相変わらずミオちゃんと距離をおき、辺りを心配そうに見回して  
いる)

おばさん

(店の中からあわてて飛び出してくる。店の前で、ミオちゃん  
の方に向かって、口の前に両手で輪を作り、大きな声で)どうし  
たのっー！

(ミオちゃんは、おばさんのいる所に向かって走り出し、不審者がミオちゃんの後  
を追いかける。ミオちゃんは、不審者に捕まる寸前に、おばさんの所にたどりつく)

おばさん

(ミオちゃんを抱きとめたあと、すぐに自分の体の後にミオ  
ちゃんをかばうようにして隠す。そして、不審者に向かって叱り  
つけるように大きな声で)この子になんの用ですか！

不審者

(背中を丸めて、困ったような顔で)あー……、あー……、

(と言葉を詰まらせたあと、思いついたように)そうそう！道が  
わからなくなっちゃって、それで、この子に道を教えてもらって  
たんですよ。

おばさん

(後をふり返り、こわくて震えているミオちゃんに向かって)  
そうなの？このおじさんは、あなたに道を聞いていたの？

ミオちゃん

(「ちがうもん！」と言いたいが、こわくて声が出ないので、  
声を出す代わりに、首を横に大きく何度も振る)

おばさん

(不審者に向かって、怒鳴りつけるようにひときわ大きな声で)  
嘘つきっ！警察を呼びますよー！

不審者

(背中を丸めて少しずつ後ずさりしながら、急に反転し、あわ  
てて逃げ出す)

おばさん

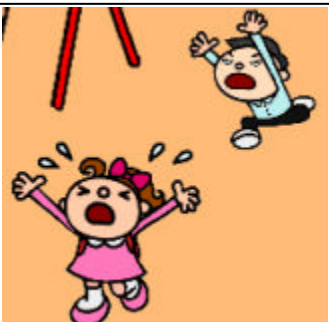
(不審者が逃げ去ったのを確認すると、安心したように)  
フーッ！(と大きいため息をつく)

おばさん

(ミオちゃんの方に向き直り、ミオちゃんの両肩に手を置き、  
ニッコリ笑いながら優しい声で)もうだいじょうぶよ。さあ、  
おばさんのお店にいきましょう。(と言って、ミオちゃんの肩を  
抱きながら店の中に連れていく。ミオちゃんは、うなずいたあと、  
おばさんについでつく)



(イメージ)



(イメージ)



(イメージ)



おばさん さあどうぞ、ここに座って。(と言って、ミオちゃんを椅子に座らせたあと、ミオちゃんの前にはさまづき、ミオちゃんと同じ視線で)あなたのお名前は、なんて言うの？

ミオちゃん ミオです。

おばさん (ミオちゃんの両手を握り)そう、ミオちゃんっていうんだ。(と言ってニコニコ笑う)そうだ、ミオちゃん、ちょっと待っててね。警察に1110番通報するからね。(と言ったあと、電話の所に移動して1110番通報する)

警察官(電話) はい、1110番センター静岡です。何がありましたか？

おばさん 不審な男に誘拐されそうになった女の子を保護しています。すぐに来てください。

警察官(電話) わかりました。あなたの住所とお名前、電話番号を教えてください。

おばさん わたしは、子ども1110番の家の 市 町二番地です。電話番号は、 の 市 区 番地です。住所は、

警察官(電話) わかりました。すぐに警察官を向かわせますので、その子を保護しててください。お願いします。

おばさん はい、わかりました。(電話を切る)



(イメージ)

おばさん (ミオちゃんの所にもどり、ミオちゃんの横に座り、頭をなでながら、優しく慰めるように)こわかったね、もうだいじょうぶだからね。すぐにおまわりさんが来てくれるって。それまで、おばさんといっしょにいようね。(ミオちゃんの肩を優しく抱く)

ミオちゃん (ニコニコ笑って)ハイッ！(と元気良く答える)

おばさん (ミオちゃんの顔を見ながら)このお店はね、子ども1110番の家なのよ。だから、ミオちゃんが困ったり、こわい目にあったときには、すぐことびこんでおいで。おばさんが、絶対にミオちゃんを守ってあげる！(と言ってニコニコ笑う)

ミオちゃん (ニコニコ笑って)ハイッ！(と元気良く答える)

(警察官が店に到着する)

警察官 署の ですよ。(おばさんに向かって敬礼する)女の子はだいじょうぶですか？

おばさん はい、この子です。名前は ミオちゃんと言います(と言って、ミオちゃんの肩に手を置く)だいじょうぶです。怪我もありません。(と力強く答える)



(イメージ)

警察官 分かりました。これから私がミオちゃんを自宅まで送り届けます。ご協力ありがとうございました。(おばさんに向かって敬礼

したあと、椅子に座っているミオちゃんのをそばに近寄り、ミオちゃんの目線まで自分の目線を下げて（さあ、ミオちゃん、もうだいじょうぶだからね。おまわりさんが、ミオちゃんをお家まで送ってあげるからね。）と言ってミオちゃんの頭をなでる（

ミオちゃん

ハイッ！（と元気良く答える）

ミオちゃん

（椅子から立ち上がり、おばさんに向かって（おばさん、ありがとうございます。）と言って礼をする）

おばさん

おりこうさんだね、いつでも遊びにいらっしやい。（と言って

ニッコリ笑う）

ミオちゃん

ハイッ！（と元気良く答える）

警察官

それじゃあミオちゃん行こうか。

ミオちゃん

ハイッ！（と元気良く答える）

警察官

（おばさんに向かって（それでは失礼します。（敬礼する）

おばさん

（警察官に向かって（ご苦労様です。ミオちゃんのこと、よろしくお願いします。）

警察官

はい！

ミオちゃん

（おばさんに向かって、ニコニコ笑いながら（さようならー。）

（と言って手を振る）

おばさん

（ニッコリ笑って（はい、さようならー。）と言って手を振る）

（警察官に連れられて、ミオちゃんが立ち去る）

ナレーター

ミオちゃん、ぶじでよかったね。子ども110番の家の方は正義の味方です。みんなも、お外で危ない目にあったり、困ったときは、すぐに子ども110番の家にかけて込んで、助けてもらおうね。

## 【場面五】 ミオちゃんの家

五 おかあさん

（ミオちゃんが、ソファで、おかあさんの横に座っている。ミオちゃんの足下には、飼い猫のテンちゃんがいる、毛づくろいをしている）

ナレーター

ミオちゃんは、お家につくとすぐ、学校からの帰り道に公園でこわいおじさんに声をかけられたことや、大きな声を出して助けをもとめたこと、子ども110番のいえのおばさんに助けてもらったことなどを、おかあさんに話しました。

ミオちゃん

あのね、おかあさん。今日ね、タツヤちゃんとサキちゃんと



（イメージ）

いっしょに学校から帰る途中、公園の中に子猫が捨てられているのを見つけたの。子猫と遊んでいたら、こわいおじさんが来て、わたしをつれていこうとしたの。

おかあさん

タツヤさんとサキちゃんは、いっしょじゃなかったの？

ミオちゃん

うん、公園でさよならしたから、わたしひとりだったの。

おかあさん

（慰めるように）こわかったね。

ミオちゃん

でもだいじょうぶ！大きな声で「ウォーッ！」て叫んだら、

子ども110番の家のおばさんが助けに来てくれたよ。（と

言ってニッコリ笑う）

おかあさん

（ミオちゃんの頭をなでながら、ホッとしたように）そう、大きな声で助けを呼ぶことができたのね、えらかったね。でも、学校から帰ってくるときは、絶対にひとりで帰ってきちゃあだめよ。必ずタツヤくんやサキちゃんといっしょに帰ってくるのよ。（と言いつつ、ミオちゃんを優しく抱きしめる）

ミオちゃん

ハイッ！（と元気に答える）

おかあさん

（ミオちゃんの顔をのぞき込みながら）さあ、ミオちゃん、今からおかあさんといっしょに、子猫たちを迎えにいこうね。

（と言いつつ、ニッコリ笑う）

ミオちゃん

（驚いて、うれしそうに）ええっ？ほんとっ？（と言いつつ立ち上がる）

おかあさん

ええ、本当よ。さあ行きましよう。（と言いつつ立ち上がる）

ミオちゃん

（うれしそうな顔でテンちゃんを見て）テンちゃん、良かったね。もうすぐお家に、テンちゃんのお友達がくるよ。仲良くしようね。（と言いつつ、テンちゃんの頭をなでる）

テンちゃん

（うれしそうに）にゃーん！

ナレーター

公園に捨てられていた子猫たちも、ミオちゃんお家で飼ってもらえることになって良かったね。さあ、みんな、

ミオちゃんが、どうして悪いおじさんにつれていかれそ

うになってしまったのか

ミオちゃんが、もしあなただったどうしたか

学校から帰るときに、どんなことに気をつけたらよいか

などについて考えてみましたか？あとで、お友達やお家の人、先生

などと話し合ってみましよう。それでは劇を終わります。

おわり



（イメージ）

作成 平成十八年一月

静岡県警察本部生活安全企画課

(注)この子ども安全寸劇は、県警ホームページの「子ども安全情報」のコーナーから出力することができます。